人間学科共通科目「人間学」講演

みんな地球に生きる人
～日本の国際化と子どもの未来～

アグネス・チャン

日時：2015 年 6 月 18 日（木）午前 9 時
会場：創価大学 S201 教室

〔講演〕

創価大学の皆様、おはようございます。アグネス・チャンです。本日は皆さんの大学にお招きいただき、有難う御座います。短時間ですができる限り本日の演題に沿って話をして参ります。どうぞ、最後までよろしくお願いいたします。

皆さんのご参考になればと思いまして、自身の幼少期のお話をさせて頂きます。本日の演題は「みんな地球に生きる人」というタイトルですが、タイトル自体は当たり前のように聞こえます。みんな地球の上に生きているくらいは誰だってわかります。ただ、私もそうですが、つい自分の生活が忙しくなり、自分のサークル内の人たちのことのみを考えるだけで、それ以外の時間を持てないという現状があるかと思います。それ以外の場所にどのような人が生きているのか、何を考えているのか、という点については考える余裕もあまりない、というのが現状ではないでしょうか。しかし、私の場合、自分の生まれた立場が少し微妙であり、また様々な活動、仕事を通じて、多様な国々で多くの人たちと出会うことができました。私はそういう出会いの中から、大切なことを多く学ばせて頂きました。

本日は、そういう出会いをありのままお話し、皆さんの未来、子どもたち

の未来、地球の未来を考えるときの参考にしていただければ幸いです。

世界の子どもたちの現実

私は香港に生まれ、香港で育ちました。先ほども紹介して頂きましたが、17歳まで香港に在住し、17歳で来日いたしました。私は6人兄弟の4番目として育ちました。

兄弟が多いと思われるかもしれませんが、当時はこのような家庭が一般的でした。そこには様々な理由が考えられます。現在の日本は平和で安定した社会となっているため、生まれたら、通常は無事に生育いたします。だから、若者はほしい数だけ子どもを持てる環境にあります。しかし、私の母の年代ではそのような保証はどこにもありませんでした。きっと母は、産めるだけ産めば、何人かは育つであろう、といった半分賭けのような気持ちで産んだのではないかと思います。そのことを母に言うとよく怒っておりましたが、実際、母は9回妊娠し、そのうち生まれたのは7人でした。そのうち1人を亡くしているので、結局育てられたのは6人となりました。私の母の話ですので、遠い昔の話のようですが、実際、現在様々な国を訪れてみると、我々のように安定した状況で子育てができる社会がそれほど多くないという事実に気づかされます。

ユニセフの統計からいうと、毎年630万人以上の子どもたちが5歳になる前に死んでしまいます。ではどのような地域で、どのような原因で子どもが亡くなっているのでしょうか。場所でいうと、だいたい貧困国と戦時中の国です。地図の上からいうと、アフリカはサハラ以南です。

アジアも多いですが、特に南アジア、国でいいますとインドやバングラディシュといった地域です。とくに、インドではたくさんの子どもが亡くなります。最近の中東も、多くの子どもたちが犠牲になりはじめました。多くの場合、その原因は戦争です。戦争以外では、非常に単純な原因で亡くなっています。例えば多くの子どもたちは下痢で死亡します。私たちは安全な水が当たり前の社会で生きていますが、安全な水が飲めない地域はたくさん存在し

ています。世界では５人に１人は安全な水が飲めないといわれています。汚れた水を飲むと下痢になります。通常、下痢は薬を飲めば治ります。あるいは母親による食事の管理などで治癒に向かいます。しかし医者もいない、薬も無い地域では、汚れた水を飲んで下痢になり、脱水状態になり、あっという間に死に至ります。

これは特に、１歳未満の幼児に多いです。気管支炎、肺炎でたくさんの方が亡くなります。肺炎や気管支炎は空気媒介ですから私たちも疾患しますが、やはり薬がない、医者がいないというような状況下では病状をこじらせて死に至ってしまいます。予防注射さえしていればかからない病気で死んだりします。そして、もちろん戦争の犠牲でなくなるケースも存在します。しかし、一番根本的な理由は栄養失調による死亡です。満足に食べられないから、身体が弱り、抵抗力が低下します。ちょっとした病気で死に至ってしまいます。しかしこのようなケースは全て人間によって防げる原因です。努力すればいくらでも亡くなる子どもたちの数を減らすことができるはずです。しかし、いまだに何百万人もの子どもたちが５歳になる前に死んでしまいます。しかも、その中で一番多いのは１歳未満児です。生まれてすぐに死亡する子どもたちが多いのです。１歳にたどり着く前に死んでしまうのです。ですから、１歳までに子どもたちを強くする、５歳になるまで死なせない、というのが、いまユニセフの中の一番大きな課題となっているのです。私たちは、そのような原因で子どもたちを死に至らせている国の現場を訪問していますが、実際に行ってみると、そのような国に限って、たくさん子どもたちが出生していることに気づかされます。私たちの立場からすれば、「少し控えてくださいよ。そんなにたくさん産んでも育たないから」と言いたくなります。しかし自分の赤ちゃんを何人も亡くした体験を持つ母親は、たくさんの子どもを産もうとします。私たちが止めに入っても、「この子が育つのを誰が保証してくれるのよ。あなた保証してくれますか。私は若いうちに産んどかなきゃいけないんですよ」と言われてしまうと返す言葉がなくなります。結果としては多産多死という現状が続いているのです。たくさん産まれて、たくさん死んでしまう。

私は、この多産多死を止めるために、２つの最低条件があると考えています。まず一つ目は平和です。戦争になると、たくさんの人々が死にます。戦争が終ると大人の死亡率は急激に下がります。しかし子どもの死亡率は何年経っても下がりません。一つの国がもう一度子どもを育む力を持つまでには時間がかかるのです。結果としては、戦争が終わっても、子どもたちは死に続けます。そのうちにまた内戦が起き、子どもが犠牲になる。悪循環が生じています。子どもたちを本当に守りたいのであれば、絶対に戦争を起こさないことです。対立してもかまわない、口喧嘩してもかまわない。しかし戦争しないことです。何とかして、話し合いで解決してほしと思います。

もう一つは、安定した生活です。これも贅沢は言えません。面倒を見ている大人が、食べ物を持って帰ってくるくらいの状況が必要です。面倒を見ている大人が食べ物を持って帰ってこられなければ、子どもを救うことはできません。例えば、作物の栽培を支援するとか、川や海のそばに住んでいるのであれば、漁に参加する機会を提供するとか、ちょっとした訓練を与えて雇用するとか、なんでもいいと思います。しかし、大人が食べ物を持って帰ってこられなければ、状況はよくなりません。残念ながら、まだたくさんの国が、この二つの最低条件を有していません。したがって、たくさんの子どもたちが死に至ってしまうのです。私はそのような国々をたくさん訪ねましたので、この後、そこに生活している子どもと、その家族の話についてもお話します。

６人兄弟のなかの私

それでは、さきほど言及しました、私の幼少期の話をさせていただきます。私は６人兄弟の４番目として生まれました。ちょうど真ん中です。真ん中の子どもというのは、忘れられてしまう傾向にあるようです。最初に生まれてくる子ども、最後に生まれてくる子どもというのは目立ちます。最初は珍しいから、最後はもうこの先、生まれてこないから、という理由からでしょう。真ん中の子というのは、一番親が忙しい時期の子どもです。上がまだちゃんと育っていない、下もまだ生まれてくるということで、真ん中の子どもと

いうのは案外、存在が薄い場合が多いようです。しかし、私の存在が薄かったことにはもう一つ理由がありました。私の兄弟構成は、一番上が兄、それに続き姉が２人、そして私と弟２人でした。

ちょうど３人姉妹がくっついて生まれましたので、よく姉たちと比べられました。私の２人の姉は、どちらかというと目立った存在でした。上の姉は、顔が優秀でした。つまり可愛らしい女の子でした。学校の中でも目立っていました。なにか行事があると、必ず姉は選ばれて花束贈呈などをおこなっていました。演劇をやる場合は、常に主役でした。白雪姫とかシンデレラとか、私たちは木とか花とか、動かない役ばかりでした。姉は10代でスカウトされ女優になりました。やっぱり綺麗な女の子だったとみんな納得しましたが、姉はその後、引退し、現在は専業主婦となっています。それでも周囲の人たちは、姉を褒めています。「アイリンさんって、幾つになってもお美しいですね」って。そうすると姉は「ごめんなさいね。美貌を治す薬ってないのよ」と答えるのです。顔は二枚目ですが、性格は三枚目だと思います（笑）。非常に面白い姉だと思っています。明るくて、可愛くて、面白い。ですからいつも人気者なのですね。その姉に続くもう一人姉は周囲から「頭がいいね」と小さい時から言われておりました。小学校の時から常に成績は１番でした。香港大学の医学部に一発合格し、卒業時には地元の新聞にも掲載されたのです。同大学で、女性とし初めてトップで卒業したからです。私は二人の姉とよく比べられました。比べられなければ、私も普通の子として育ったと思います。しかし比べられるので、「私はいけない子なのかな。何か悪いのかな」と思うようになっていきました。さらに母は、周囲の人が私たちを比べると必ず、「ごめんなさいね。アグネスを妊娠した時、一番家計が苦しかったのよ。なにか食べ物、足りなかったのかしら」って謝っていました。私は「ええっ、じゃあ私は欠陥商品か」って思ったりしました。母が謝るたびに、少しずつ私の性格が暗くなっていったような気がします。「あっ、やっぱり私はだめなのか」というような気持ちになっていきました。

ですから絶対に子どもたちは比べてはいけません。誰もが、たくさんいいものを持っているので、むしろ励まして、励まして、いいところを出させる

ことが大事です。しかし現代社会では、みなさんのご両親たち、あるいは先生方が、比べていなくても、周りが比べているということがよくあります。そして子どもたちも自分で、自分と周りの人を一生懸命比べてしまっています。ここでとても強調しておきたいことは、「みんなすごく大切な存在です。みんな素晴らしい存在です。そのような周りからのプレッシャーに負けないでほしい。自分の中には、必ずたくさんの素晴らしいものがある。今は、誰もわかってくれないかもしれませんが、絶対、忘れないでほしい。自分のいいところを大事にしてください。自分を信じてください。忘れなければいつの日か、「自分のいいところを今出したら絶対にみんなのためになれる」、「今、それを出したら絶対認めてもらえる」という瞬間が訪れます。そのようにして自分の力を出せば、本当にいろんな人の力にもなれますし、自分の将来を左右する決定力にもなるのです。またその力が、自分を幸せにする原動力となるのです。したがって、どんなに周りから「あなたは駄目だよ」と言われても、信じてはいけません。駄目な人間は存在しません。みんな大事な人、みんな大切な人です。認めてもらえる瞬間は必ず訪れます。しかしそのためには、自分の中の大切なものを忘れないということが大切です。忘れていなければ、その瞬間が来たときには、「あっ、今だ」と気付きます。大事に育みましょう。周りが励ましてくれたら有難いですが、励ましてもらえなくても、自分で励ますことが大切です。

しかし私の場合は、小学校６年生くらいになった時、自分からも見ても地味な子になっていました。あまり自信もないし、一生懸命友達も作りませんでした。私みたいな子とは、誰もあまり話をしたくないんだろうと勝手に思い込んでしまっていました。自分のことをあまり好きじゃなかった。これが一番の問題です。「自分のことを好きにならなければいけない」と教育者は常に言っていますがそれは“self-esteem”と呼ばれております。要するに、”自尊心”といいますか、自分を正しく評価できる態度のことです。それは非常に大事な態度です。それができないと、心の中に余裕がなくなってしまうそうです。なぜこの態度が大切かというと、“self-esteem”、あるいは自分を信じる態度が備わっている子は心の中に余裕ができるのです。ですから、例

えば自分よりうまくやっている子がいたとしても、「おっ、あなた上手だね。すごい、あの人すごい上手。よかったね、よかったね」って。人の喜びが、自分の喜びとなります。そして喜びいっぱいの人生になっていくのです。

大切なことは、例えば周りの人が自分を褒めてくれない、あるいは励ましてくれない状況でも、自分をちゃんと認めることだと思います。みなさんも、どうか今日を境に、自分がいかに大事なのか、どんなにキラキラ輝いている命なのか、大事な人なのか、人のためになれる人なのかって、信じていただきたいと思います。

施設の子どもたちから学んだこと

そうは言いましても、私自身、自分のことをあまり信じていませんでした。先ほども申しましたが、私は非常に地味な子どもでした。しかし私の場合は、そのままでは成長しませんでした。中学１年生の時、私にとって非常に大事な出会いが訪れました。私の通う中学校ではボランティア活動やクラブ活動が盛んでした。私は遊び半分でボランティア活動に参加しました。最初は新聞配り、チラシ配り。初めてちゃんとした仕事に行かせてもらったのは、「身体が不自由な子どもたちの施設」でした。私は先輩と２人で周りました。非常に遠かったことを覚えています。週２回、バスを乗り継いで、山道を 40 分歩いて訪問しました。その山道の途中に、埋める前の死体の置き場がありました。私から見れば不気味だし、心身ともに疲れてしまい、愚痴を言ってしまいました。「身体が不自由だったら、もっと便利なところに造ればいいんじゃないか」って。結局ぶつぶつ言いながら山の谷の底に造られた施設にたどり着きました。入り口は中庭に面していました。

私たちが入って行くと、看護士さんたちが出てきました。私たちの顔を見て、いきなり大きな声で叫ぶんですね「おーいっ、お姉さんたちが来たわよー」って。そうすると、いろんな建物の中から、いろんな道具を使って自分の身体を支えて、一生懸命やってくる子どもたちが現れました。脚のない子は、小さな椅子を土台にして、両手を使って、まるで地面の上を泳いでい

るみたいな形でやってきました。手のない子どもは肩でバランスをとっていました。自分は手が使えないのに、寝たきりの仲間を押すために、お腹の筋肉を使っていました。必死になってやってきました。あっという間に私たちの周りに40人の子どもたちが集まっていました。びっくりして、言葉が出なくなりました。生まれて初めての光景の前に体が棒のようになりました。先輩が私の耳元で、「なに泣いているの、早く挨拶しようよ」と言われて、涙が出ているのに気づいて、急いで拭いて挨拶しました。拍手が沸かない。「あれ、何か変なことでも言ったのかな」と思いました。後でよく聞いてみたら、結局その施設では手が使えない子が多く、拍手ができないということだったのです。その代わりに、子どもたちは「loooo……！」とお腹の底から全力で声を発し、私たちを歓迎してくれました。その声は今でも鮮明に覚えています。歌に聞こえたのか、叫びに聞こえたのか鮮明には覚えていませんが、その声を聞く前とその声を聞いた後では、私の人生観が変わっていました。

その晩、改めて自分の手足を見ました。私は生まれながらに恵まれていた。手があることは当たり前だと思っていましたし、毎日便利に使っていました。しかし、私より幼い子どもたちや私と同年代の子どもたちが生まれながらにして手をもっていませんでした。その子どもたちは一生自分の手でご飯が食べられない。身体が痒くても掻けないんですよ。好きなところに走っていけない。寝返りができない子もいました。「手があることは当り前じゃなかったんだ」というようなことに初めて気づきました。とてもショックを受けました。ボランティア活動を通して、私はいろいろな人と出会うことが許されました。目の見えない子、親のいない子、難民の子、過ちを犯して少女院みたいなところに入れられた女の子たちの話し相手もしました。がんの末期患者の看病もしました。亡くなられた際にはお葬式も執り行いました。誰も来ないお葬式でした。私と先輩は一生懸命泣いてあげて、「本当にこの方、報われるのかな。どういう人生を送って、こんな寂しい最期を迎えなきゃいけないんだろう」と、自分たちに問いかけました。

「あなたはボランティア活動を通して何を学んだの」とよく聞かれます。

まだ小さかったのでよくわかりませんでした。しかし、少なくとも一つの重要なことは学んだと思います。それは、いろんな人がこの世の中に生きているという事実です。あんな狭い故郷の中でも、私の知らない所で、すごく厳しい状況で頑張っている仲間がいた。でも、私は、知りませんでした。なぜ知らなかったかというと、私は自分の周りしか見ていなかったのです。私は自分の周りしか見ていないのに、不平不満でいっぱいでした。なんで、姉のように産んでくれなかったの。なんでみんな比べるの。なんで、もっと裕福な家庭で生まれてこなかったのか、というように自分を可哀そうな存在として理解していました。

とんでもない事でした。ボランティアで会った子どもたちと比べれば、私はすごく恵まれていました。少なくとも、私は屋根の下に寝ていました。私は服を着ていたし、ごちそうはないけど、一日に２回あるいは３回はご飯が食べられた。しかし難民の子どもたちはそういうことが全部できません。もちろん、服もないし、外で寝ていますし、唯一の食べ物が生ごみでした。朝一番に子どもたちが拾ってきます。しかし腐ったものは食べられません。ですからそれを干すのです。干して乾いたら、炊きなおして食べるのです。干している時、炊いている時にはすごい悪臭が漂います。私は、彼らが住んでいるスラムに入った時、その匂いを嗅いで、何度も吐きました。そのくらいひどい悪臭でした。しかしそれが彼らにとっての唯一の食べ物でした。私には親兄弟がいました。私は学校に行けていたのです。私はお腹が痛くなったら、薬が飲めました。私はどしゃぶりの雨の中で、外で泣きながら夜が明けるのを待つこともない。一人で病気になって、怖くなって死んでいくこともない。私たちはすごく恵まれた子どもなんだなぁって、やっと理解できたのです。

「自分が恵まれているのに、それに気づかないのが一番不幸だ」ってよく言います。その通りだと思います。私は自分を不幸にしていただけなのです。

でも、ちょっと待って。私が幸せな子どもだったら、なんで私は苦しいの。毎日「起きるのがいやだなぁ」とすごいコンプレックスを抱えているのはなぜ。そんな自分が嫌い。人と会うのも嫌だ。「なんで、こんなに苦しいんだ

ろう」って思いました。幸せな子どもというのは、楽しいはずじゃないかと悩みました。そして、いろいろ考える中でまた気づいたことがあったのです。

きっと、私は自分のことばかり考えていたから苦しくなっていたのかな。エネルギーが余ると自分のことばかり考えるので、そのエネルギーが中へ中へと入りこみ、自分の中にエネルギーがいっぱい詰まってしまって、息ができなくなっていたのかなと。

しかしボランティア活動のおかげで、生まれて初めてですが、本気で周りの人たちのことを考えられるようになったのです。自発的に取り組みました。そうすることによって、胸に詰まっていたエネルギーの出口ができました。どんどん発散できたのです。そうすると、この心に少し余裕が生まれました。苦しくなくなったのです。人の前で話せるようになりました。自分のことばかり気なっていたのですが、それを気にしなくなったのです。この状況って何なんだろうと考えました。日本語の中にはぴったりの言葉があります。それは「無我夢中」という言葉です。私は無我夢中になっていたのです。子どもたちのことで夢中になり、自分を忘れてしまったのです。それによって解放されたのです。どうか、若い皆さんは、幾つになっても、いつでも無我夢中でいてください。何か一つでもいい、二つでもいい、何でもいい。生きることでもいい。無我夢中になってください。それが幸せへの一番の近道です。無我夢中になっているときが、一番自由です。何にもかまわない、周りの目も何にも。そのおかげで私は変わりました。気が付いてみたら、友達も増えて、子どもたちに食べ物をあつめ。子どもたちの前で喋って、歌を歌っていました。

歌手デビューと来日

そのような状況の中、14歳の時、香港でスカウトされることとなったのです。「歌を歌ってみませんか」と言われました。歌ってみると、なぜかよくわかりませんが、あっという間に香港で、デビュー曲がヒットしたのです。気づいてみたら、私は歌手になっていました。しかしそれは、本当に子ども

たちのおかげだと思いました。そんな自分が存在していたということさえ知りませんでしたから、人の前で歌うなんて考えられませんでした。しかし結果として歌手になっていたのです。

現在は競争社会で、若者も様々大変な思いをしています。私たちの小さい時よりも、物質的には豊かになっていますが、違った意味で苦労をしています。現代社会は重要なターニングポイントに立っていると思います。技術的にも、意識的にも。いろんな意味で、国の形や世界の形が変わり始めています。地球とどうやって付き合うのかなど、すべての分野がターニングポイントに来ています。

今まで私たちが作ってきた壁、男女の壁、人種の壁、宗教の壁などをどのように解体するのか、など重要な今ターニングポイントに立っています。これから100年200年の地球というのは、皆さんの考え方、皆さんの行動によって決まっていきます。私は今年で60歳を迎えますので、どこまで頑張れるかわかりません。私の末っ子はちょうど皆さんと同い年です。18歳です。今年、大学生になりました。地球の将来は若い皆さんにかかっているのです。皆さんが未来を決めていくのです。私たちが想像できないような世の中が、これから生まれてきます。すごく速いペースで生まれてくるのです。その中にあって、ぜひ、皆さんが一番貢献できるもの、自分が一番得意とするものを惜しまずに出してください。

なぜなら、もしかすると、すごくよくない面を発揮している人が存在しているかもしれないからです。それらに対抗するためにも、自分の一番得意とする長所を惜しまずに発揮してほしいと思います。自分を信じてください。

周囲の人が驚くようなことであっても、すごく良いアイディアになるかもしれません。言ってみる、実行してみることが重要です。いくらでも可能性は存在しています。もうすでに行き詰った社会、成熟しきった社会ではないか、と思っている人もいるかもしれません。しかし、実はそういう社会はすでに腐り始めていて、次の種が芽を出しているところなのです。そして、腐敗した社会が栄養となり芽が発育していきます。それが皆さんなのです。ぜひチャンスだと捉え、頑張っていただきたいと思います。

私は気が付いたら歌手になっていました。しばらく香港で歌っていましたが、日本でも歌ってみませんかという話が来ました。私は日本にとても行きたかったのですが､父は許してくれませんでした｡母はどちらかというとミーハーなほうなので応援してくれましたが、父は顔が丸いわりには、頭が四角い人でした。かなり反対されたのです。その父をなんとか説得してようやく日本に来ることができたのは17歳の時でした。

今の皆さんよりちょっと若い年齢でしたが、ほぼ同じ時期に来日したのです。日本に来て、日本のアイドルとして活動を開始しました。いま言うとちょっと恥ずかしいですが。その時代の話もしたいのですが、今日は時間に余裕がありませんので、世界の子どもたちの現状や、私が見てきた国の話をしたいと思います。アイドル時代の話については、別の機会に、お茶とお新香を用意していただいて、ゆっくりお話ししたいと思います。いずれにしましても、私は歌手として来日し、日本の皆さんに応援していただいたおかげで、歌がヒットし人気を得ることができました。その後、一時期、私はカナダへ留学し、また日本に戻りました。戻ってきた時には、もうカナダの大学を卒業しておりました。本当はボランティア活動と仕事を両立したいと思っていたのですが、その時代は事務所からボランティア活動を許してもらえませんでした。理由としては､「偽善者だと言われちゃうよ」とか､「大事な時間を使ってボランティアをやるなんてとんでもない」といったものでした。ですから、その時期はすごい葛藤を抱えておりました。

「では、なぜ私が歌手になれたのか、歌を歌うことを諦めないでこられたのか。ボランティアがあったからこそ現在の自分があるのではないのか」と。事務所とは、喧嘩にまでは到りませんでしたが、よく討論しました。考え方が違うので、もうやめてしまおうかとも思いました。というのも､「もう少し色気のある大人の歌手として歌ってほしい」といった要望も出ていたからなのです。その時、私には色気がなかったのです。今はかなりあると思いますが（爆笑)。冗談です。家に帰ってお母さんに言わないでください。いずれにしましても、当時の私は、色気などいらない、色気のある歌手にはなれないと思っていました。皆さんも働き始めたらきっと様々な壁にぶつかると

思います。違う壁だと思いますが。そのような状況下で、私は歌手をやめたくなってしまいました。弱気になってしまったのです。ではなぜやめなかったか。実は初めて中国へ戻った時の体験が私の歌手人生をつなぎとめてくれたのです。

母の故郷・貴州での誓い

私の祖国、香港はイギリス植民地でした。私が生まれた時はイギリスの植民地でしたから私はイギリス人なのです。イギリス人に見えないですか。見えないですね。幼少期にはよく鏡をみて悩みましたよ。「なぜ私はイギリス人なんだろう」って。しかしそのような悩みの背景には、植民地主義と結びついた様々な歴史的要因が存在していたのです。

イギリスの植民地に生まれたから、イギリスの国籍を与えられました。しかし他方、中国は非常に遠い存在でした。遠く感じていました。なぜなら、当時の香港と中国は思想や主義が違っていたからです。中国は香港に対し門戸を閉ざしながら政治をおこなっていました。

80年代になってようやく、中国は香港に対し門戸を開きはじめました。そのため私も中国に入れるようになりました。父は香港生まれですが、母は中国の山奥、貴州というところに生まれた人でした。私は、一度は母が生まれたところを見たい、母の親戚に会ってみたいと思っていました。そして中国に行く決意をしたのです。いまだ非常に厳しい政治情勢が存在していましたが、母は私に中国へ行ってもいいと言ってくれました。

貴州は中国の中でももっと貧しい州の一つです。母は私に、貴州の人に対し見捨てるような顔を見せてはいけないよ、と忠告してくれました。そうして貴州を訪問したのです。

貴州についた時は本当に驚きました。本当に貧しい地域でした。道路もない、電気、水道もない、泥だらけの地域でした。訪問時は冬でしたが、子どもたちは服も着ていない、靴を履いていない子どももたくさんいました。

しかし私たちが帰る際には、皆がお金を出しあってごちそうを作ってくれ

ました。皆で食べ終わったら、村中の子どもたちが集まってきて、「おばちゃん、歌を歌ってあげる」って言うのです。「じゃ、歌って」と言ったら皆で声をそろえて歌ってくれました。

♫ 越過大海你千里而歸
　朝北的窗兒為你開～（歌唱、学生から拍手）

「帰ってきた燕」（歸來的燕子）という歌を歌ってくれました。「海を越えて君は帰ってきた。北を向いているあの窓。君のために開けておいた」という歌でした。びっくりして、滂沱の涙があふれました。実はこの歌は、私が台湾で録音した歌でした。皆さんご存知でしょうか。台湾と中国はその当時、対立していました。同じ中国人同士でしたが。ですから中国の歌は台湾で歌ってはいけない、台湾の歌は中国では歌ってはいけない、という状況だったのです。「なんで、みんな私の歌を知っているんだろう。なんで歌っているの。大丈夫なの？」と何度も必死で尋ねました。

実は当時、中国と台湾の間で文通が許されるようになり、母が何通も、古着の下にカセットを隠し、故郷に送ったそうです。「皆と会えないうちに、うちの子、歌手になったのよ」って。村には 1600 人くらいの人が住んでいるのですが、だいたい親戚関係にあるそうです。その中で、小学校の先生がそのカセットを受け取り、「この人は私たちの親戚ですから、いつかはきっと、もしかして、会いに帰ってくるかもしれませんから、この歌を覚えて歓迎しよう」って、何年も前から、みんなで練習をして歌えるようになっていたということでした。一生懸命歌う子どもたち、号泣する親戚たち、それを見て私は、「歌はすごいな」と改めて思いました。人間が一度憎しみを覚えてしまうと、なかなか仲直りできません。同じ民族間でも悲しい物語が生まれます。しかし歌は独り歩きをしてくれます。国境を越え、憎しみを超え、時間を超え、そして人々の心を結ぶことができるのです。「そうか、そのために私は歌手にしてもらったのかな」って、そのとき思いました。自分の歌声が、少なくとも中国の親戚、台湾の親戚、お互いにまったく会えない人々の心を

慰めていた、という事実を理解しました。「そうか、私、歌をやめちゃいけないんだ」と思えたのです。

通常、人はあまり声に出して言いませんが、歌によって同じ気持ちを共有できるのかもしれません。そのとき私は、「そうだ、歌で平和を」と思いました。そして腹を決めたのです。「私は歌をやめない。どんな状況の中でも、私は歌い続けよう」と決心できたのです。これが、おそらく私のアイデンティティの再確認だったのです。アイデンティティという言葉は、みなさんも、たぶん聞いたことあると思います。自分を確認するという意味の用語です。「私はいったい誰なのか」「何のために生まれてきたのか」「どこへ向かっていくのか」という問いはだれでも発していると思います。その時の私は、そのような経験によって、自分自身を再発見することができたのです。遅かったかもしれません。二十歳を過ぎていました。皆さんの多くは、もう自身のアイデンティティを発見できているかもしれません。しかし見つかっていない場合、将来、本当の自分と出会う瞬間が必ず訪れます。

そのような瞬間に出会った途端、目の前の霧が消散していきます。もやもや、イライラが消えていきます。そして、人間として強くなれる。なぜなら、目標がみつかれば、倒れてもまた立ち直ることができるからです。迷っていないし、倒れても、それがワンステップになるのです。迷いながら、あちこちに行っていると、結局は目標にたどり着きません。ですから、自分探しをやめないでほしいと思います。「いったい、私は誰なんだろう」「何をやっているときが一番うれしいんだろう」「何をやっているときが、一番人のためになれるんだろう」と。「これで全うできる」と思うようなものを必ず発見できる瞬間が訪れます。何かあるんです。それを探し続けることをやめなければ、本当の自分に出会う瞬間が絶対来ます。私の場合は上記の経験だったのです。その後は一本道です。迷いがなくなりました。

エチオピアの子どもたちとの出会い

もう一度、私の人生が大きく変わったのは、アフリカに出会った時でした。

初めてアフリカを訪れたのは1985年でした。皆さんからすれば遠い昔の話です。しかし残念ながらそれは過去の歴史ではありません。私が訪問した時と比べると、エチオピアはすごく良くなりました。しかし当時の悲惨なエチオピアと同じような状況の国が現在でもたくさん存在しています。現在、戦争が増えていますが、そのような地域では争いが繰り返されています。

私がエチオピアを訪れた年は、同国が干ばつと内戦で、百万人単位の人々が飢えで死に至っている、と言われていました。私はちょうどその年、24時間の総合司会、チャリティ・パーソナリティとして選ばれました。かなり売れていた時期だったのです。

そしてその際は、「エチオピアを救う」というテーマになりました。「それだったら、ぜひ現場に行かせてください」と私は言いました。しかし内戦中でもあり非常に危険な状況でしたし、様々な病気も流行っていましたので、事務所から強く反対されました。

私は、「現場に行かなければ、説得力がありません。人に募金をください、と言えないですよ」と強く主張し、ようやく許可がおりました。首都のアディスアベバはまだ良かったのですが、皆さんの募金によって作られたキャンプというのは悲惨でした。北部のスリンカ村を訪問したのですが、北へ行くにつれて、砂漠が広がっていきました。地球の砂漠化というものを理解しました。道には、本当に草一本生えていないのです。少しでも風が吹くと砂嵐になりました。まして車を走らせますから、あたり一帯に煙が舞います。そうして進んでいくうちに、どんどん道端を彷徨う人々が増えていきました。それらの人々は、満足に服も着ていませんでしたので、どのくらい痩せているのかを見て取ることができました。私たちは、痩せている人たちのことを「骨と皮しかない」と表現することがありますが、そこにいた人々は、骨と皮が一つではなかったのです。後ろから見ると、一枚の皮が骨にぶらさがっていたのです。急激に痩せてしまったからなのかもしれません。

皆さんが移動されると、その皮がお尻のところで揺れていました。「歩く骸骨」との表現がありますが、そのような例えが嘘であると理解しました。実際は、骸骨のように痩せた人は歩けないのです。倒れているか、四つん這

いで移動しているか、のいずれかです。親は歩けなくなっても、その子どもたちを連れて行かなければなりませんから、背中に乗せたまま移動していました。子どもが必死に一枚の皮を引っ張りながら、親の背中に乗っていました。そのような家族を何組も目にしました。初めて車を止めたのは検問の時でした。急に軍隊が現れました。「止まれ、動くな」って近づいてきました。私たちは動けませんでした。しかし、周りの人たちは必死に我々に助けを求めて近づいてくるのです。「助けて、助けて、この子を何とかして」って、車によじ登ってくるのです。降りて助けてあげようと思ったら、軍人がまた急に、「行け、行け、早く行け」というので、仕方なく再度、車を走らせなければなりませんでした。再び窓を見ると、窓ガラスの外側は皆さんの手のひらの膿と血がべったりとついていたのです。思わず、私は「ええ～っ」と声を発していました。そうすると現地の人が、「みなさんにとってはもう忘れかけられている病気ですが、私たちにとってはまだ命取りなんですよ。ハンセン病、皮膚病、赤痢、コレラ、マラリアやビールスが流行っていて、それが感染すると大量に出血して一晩も持たないんですよ。だから、こんなにたくさんの人がいっぺんに死ぬんです。あなたも気を付けてくださいね」と言いました。初めて車から降りたのは、麦を運ぶ作業時でした。その際、近隣の村の子どもたちが、わーっとやって来ました。子どもたちが移動すると、すごい土煙がたち、悪臭が漂いました。しかし何よりもすごかったのは、ハエの群れでした。近づいてくる子どもたちと一緒に、黒い雲みたいにハエが飛んできました。ジーという羽音を立てながらやってくるんです。私たちはびっくりして、思わずさっと後ずさりをしていました。私たちが逃げたので、子どもたちもぱっと動かなくなりました。戸惑ったのでしょう。ほんの一瞬ですが、私は自分の弱さに負けてしまったのです。「何が福祉だ、何がボランティアだ。せっかく子どもたちがやってきたのに、なに怖がっているのよ、早く子どもたちのところへ行けよ」と自分を責めている間に、ぱっと子どもたちが散っていきました。トラックに積んでいた麦の袋から粒がこぼれていたのです。それを目がけて子どもたちが一斉にトラックの下に潜り込み、砂まじりの麦をわーっと口に突っ込んでいました。生の麦です。殻がついてい

ます。砂もまじっています。それを、じゃりじゃりと食べていました。口の中は血だらけになっていました。そこまで飢えているのかって、びっくりしました。しかし現地の人は長い皮の鞭を出して、「食べるな。食べるな」と子どもたちを追い払いました。血が飛び散りました。「やめてください。怪我をするじゃないですか。落ちた分は食べてもいいじゃないですか」と止めに入りましたが、やめてくれませんでした。てんやわんやの時間が続きました。ようやく作業が終わりトラックに戻った時、大の男でも涙がいっぱいになり何も言えなくなっていました。私は現地の人からいくつか言葉を教えてもらって、替え歌を作りました。

♫トゥールリッチ、ダナナッチョー、ダナナッチョー、ダナナッチョー、トゥールリッチ、ダナナッチョー、ワーデーニア（歌唱）

トゥールリッチというのは「かわいい子ね」、ダナナッチョーというのは「みなさんお元気ですか」、ワデニアというのは「お友達」という意味でした。キャンプに着いた時には、3500 人の子どもたちが給食を受けていました。本当に厳しい状況でした。しかし子どもたちの真ん中に入って、なんとかコミュニケーションを取ろうとし、遊ぼうとしました。

替え歌を歌ってみると最初は「ん、へんなおばちゃんだな。何しに来たんだろ」というような顔をされましたが、歌っていくうちに一人、二人、三人、四人と、子どもたちが立ち上がりました。立つとどのくらい痩せているのかがよくわかりました。太ももは私の指三、四本くらいしかありませんでした。今でも倒れそうな子どもたちでした。そういう子どもたちがなんと踊り始めたのです。現地の踊りなのですが、私を歓迎するために踊ってくれたのです。スクスタという踊りです。「エイヤーハイヤー、エイヤーハイヤー、エイヤーハイヤー」と掛け声をかけ、踊りで私を歓迎してくれました。ほとんどの子どもたちは私の歌に合いの手を入れてくれました。踊りのリズムは、「エイヤーハイヤー」と叫ぶと「エイヤーハイヤー」といったものでした。私が「トゥールリッチ、ダナナッチョー」って歌うと、子どもたちが「ダナ

ナッチョー、ア、ダナナッチョー」って歌います。その姿が可愛くて、可愛くて。死ぬほど愛しかったですね。「あ、もういいや、ここで病気がうつったら、それはしょうがない。もしここで死んだら、これが運命だ」って思いました。わーって子どもたちを抱え上げて、ほおずりしたりキスしたり、本当の触れ合いができました。そのとき、わーって抱きしめて、「あー、この子と死んでもかまない」と思った瞬間、「私、生きているんだな」って、「私、生きていたんじゃないか」って実感できたの。なぜかよくわからないけど、いっぱい幸せが広がったような気がしたんですね。あれからですよ。もう、本当にどこに行っても怖くなくなりました。「子どもがいるんだから、大丈夫だ。一緒に死んでも、かまわない」っていう気持ちになれたんです。一生分の勇気をいただいたような気がしました。でも、残念ながら、バタバタ目の前で人が倒れて死んでいきます。私が直接担当した６人の子共が死んだその日、私は食事ができなくなりました。一緒に行っていた日本の看護婦さんは、私を叱りました。「お前が食べないで病気になったら、私の面倒になるのよ。もう手いっぱいだから。何しにきたんだ」と言いました。私は理屈を並べました。「南北問題じゃないか。食べものが余る国があり、食べられないで飢えて死んでいく国がある。これが直らなきゃ、何も直りませんよ」って言いました。すると「STOP ！」って言われました。「理屈は誰でも言えるのよ。あなた、本当に少しでも子どもたちに申し訳ない気持ちがあったら、与えられている役目を果たしなさいよ。理屈だけじゃだめよ」って言われた。本当にそうだなって思って、それ以後、自分が行ける時には、いろんな国へ行きました。行けない時には募金を託して、病院を造ってもらったり、学校を造ってもらったり、井戸を掘ってもらったり、里親にもなっています。

日本ユニセフ協会大使として

そして 1998 年。日本ユニセフ協会から、「私たちは一番弱い子どもたちの声になりたい。一緒に活動してくれませんか」と言われました。私はその言葉に非常に感動し、その年、ユニセフ大使の任命を受けたのです。それか

らは日々、勉強の連続でした。私の知らない子どもたちに関する問題がたくさんありました。任命を受けた年には、早々にタイに赴きました。児童買春、児童ポルノ、人身売買の実態を視察するという任務でしたが、事前には何も知らされませんでした。しかし行ってみると、生活が苦しいということで、子どもを売ってしまう家庭がありました。売られた子どもは買春宿に入れられてしまう。毎日十人あまりのお客さんをとる場合もあります。100％の確率で性病になります。時期によりますし、最近はかなり改善されましたが、私が行った時には 30 ～ 50％の子どもたちが、HIV、エイズに感染していました。発病するまでは子どもを働かせます。商品ですから。発病して使えなくなった子は、車やトラックに載せて、できるだけ遠い山へ連れて行き、捨ててしまうのです。21 世紀になってもいまだ、そのようなことが起きているという事実を信じることができませんでした。しかし山奥に行ってみると、本当に、ユニセフが支援している民間援助団体が子どもたちを拾って、育てていたのです。しかもタイの子共だけではありませんでした。近くはミャンマー、ラオス、遠くはカンボジア、中国から子どもを買ってくるのです。人身売買ですよ。女の子だけじゃない。男の子も買う。性的な目的はもちろん、それ以外にも、農場、工場、船などで働かされています。人身売買が罷り通っているのです。お金があれば何でも買えるという事実は、絶対あってはいけません。人の命なのですから。そのような経験を経て日本に戻ってからは、一生懸命に活動をし、1999 年には日本でも児童ポルノ・児童買春禁止法というものが成立しました。

その後、人身売買を禁止する法律も成立しました。それでも、いまだに毎年、世界中で、100 万人くらいの子どもたちが、売買されているのです。家族から買えなければ、家出をした子どもたちを拉致する、あるいは、普通に歩いている子どもを拉致するのです。日本の中でも行われている、と言われています。この問題については、その後も多くの国を訪れて取り組んできました。この問題は、誰もが犠牲者になりうるのです。どうか皆さんも気を付けてください。特に、若い女性は気を付けてください。

タイを訪問した翌年、私は南スーダンを訪れました。児童兵士の問題に取

り組むためでした。現在、南スーダンは独立していまます。実は本年、私は二回目の南スーダン訪問を行っています。しかし当時の南スーダンは内戦中でした。最初に訪れた際、スーダンは独立運動を展開していました。たくさんの子どもたちが兵士として使われていました。マペルという地域に行き、元兵士の男の子の話を聞きました。元兵士といいますが、12歳の少年です。サンティ君といいますが、6歳の時、目の前でお父さんが殺され、8歳の時、自らの意思で反政府軍に入りました。戦いに明け暮れる中、11歳の時、銃で撃たれ下半身不随となり、私と会った時には、何もできない状態となっていました。しかしサンティ君の場合は、まだ良い方だと聞かされました。なぜなら、彼は自分の部族にいたからです。敵に捕まった場合は様々な拷問をうけ、最終的には地雷があるところを歩かされます。地雷ばらしとして使われてしまうのです。これは残酷を極めます。ですから我々は、一生懸命、今もそうですが、そのような反政府軍や政府軍と交渉し、子どもたちだけは帰してくださいと懇願しています。なかなか結果が出ませんでしたが、昨年に入ってからは、私たちの成果が徐々にあがってきました。

今年、再び南スーダンに行った際に感じたことは、既に南スーダンが独立しているにもかかわらず、現地の人々の間では、仲間割れによる戦争が継続しており、内戦中となっていました。さらに1万人以上の子どもたちがそのような戦いに巻き込まれているとうかがいました。私が行った際は、コブラ派と呼ばれる反政府軍の武装勢力が台頭していました。彼らは昨年から、ユニセフの説得に応じて、子どもを解放しています。12000人の兵士の中で3000人が子どもでした。しかし我々の説得に応じてくれ、私が訪問した際には、そのうち1200人の子共が解放されていたのです。

私はリハビリテーションセンターを訪れました。一番年少の子共は6歳でした。6歳から戦争に参加していたのです。その幼さに驚かされました。年長は18歳の少年でした。その訪問では、そのコマンダーと呼ばれる将軍とも会見をしました。「なぜ子どもを使うのですか」と質問すると、「わざとじゃない」と言うのです。戦争の中で、子どもたちが親を亡くし、他の部族や政府軍に捕まらないよう、彼らを保護する過程で、結果的に彼らが兵士となっ

ていくということでした。

当然、徴兵による場合もあるとは思いますが。しかし彼が述べた言葉が印象的でした。「ユニセフが受け皿を作ってくれたから、私は解放できたのですよ。そうじゃなきゃ、子どもたちを村に帰そうと思っても、親もいない、土地もない、食べるものもない、という環境では、できないのです。だから、私はユニセフに感謝しています」と。実際、受け皿がなければ、帰せないのです。リハビリテーションセンターの中で、子どもたちに話を聞くと、すでに親兄弟を亡くしている子どもたちがたくさんいました。「これからどうやって食べていけばいいの」といった質問を子どもたちから何度も受けました。だからユニセフはリハビリテーションセンターの設置やそこでの活動以外にも、子どもたちを村に帰すための活動、例えば親戚を探したり、教育環境を整えて子どもたちに教育を提供したりといいた仕事を展開しているのです。現地の人の中には、もう一度、以前のように農業をやろうと思っても、道具がない、土地も取り上げられている、といった状況が存在しています。以前従事していた漁の職に戻ろうとしても、同じく道具がない、船を失くした、といったケースが多く存在しています。そのように様々な課題が山積していますが、一つ希望が見えました。それは、今年に入り、私が日本に戻ってきてから、コブラ派が3000人の子どもを全て解放してくれたことでした。

現在、我々は中央アフリカ共和国やその他の地域で、そのような活動を行っています。本当はもっと様々な国の話をしたいのですが、時間の都合上割愛せざるを得ません。例えばイラクとか、昨年行った中央アフリカ共和国とか、ソマリアとか。本の中にも書いてあります。「みんな地球に生きる人」というタイトルで１巻から４巻まで刊行されています。その中に、私が訪ねた多くの国の話が書いてありますのでぜひ読んでください。様々な問題について触れてあります。人身売買や戦争、教育環境の不足など多様な問題について言及しています。ぜひ読んでいただければ幸いです。私に与えられた時間が来ましたのでまとめに入りたいと思いますが、まとめは質疑応答の中でお伝えしたいと思います。

ここまでの話を熱心に聞いてくださり、本当に有難うございました。心が

一つになれたような気がします。

〔質疑応答〕

司会　アグネス・チャンさん、本当に感動的なスピーチ、有難うございました。ではこれより質疑応答の時間に入りたいと思いますので、質問のある学生は挙手をお願いします。

男子学生Ａ　本日の講演、本当に有難うございました。今、世界平和のためにできることについて学んでおります。その際、よく知ること、その世界を知ることが重要であると教えられているのですが、アグネス・チャンさんの視点からみて、「今の我々が世界平和に対しできることはなんなのか」という点についてご意見をお聞きしたいと思います。

アグネス・チャン　おはようございます。実際、私の母親の時代と比べれば、今の私たちの時代は、比較的平和な時代であるとは思います。ただし、小さな戦争、特に最近は宗教の問題と関連し様々な紛争が生じています。中東とアフリカのサヘル地域などはその代表です。しかしこれは宗教だけの問題ではなく、経済的な問題や気候変動の問題など大きな課題と結びついているのです。

よく「なぜ紛争が気候変動と関係しているのですか」と質問されますが、私の理解では、今まで訪ねた様々な国でも、温暖化という現象が、各地域の戦争と強く関係しておりました。今、私が言及した中東およびサヘル地域もそうですが、年々雨が降らなくなっています。今、私たちが関心を抱いているシリアでもそうですが、多くの紛争が、雨の降らなくなった地域から生じているのです。

例えばサヘル地域は、アフリカの北部に位置していますが、上はサハラ砂漠、下は草原地帯となっています。中央部は草原でもなく、いまだ砂漠地帯ともなっていません。

そのような地域の多くが北部の雨がふらなくなった地域と隣接しています。例えば、ナイジェリアです。現在、激しい戦闘状態となっていますが、同地

域も北はサヘルにかかっています。シリアもそうですが、ナイジェリアは、私たちから見れば豊かな地域です。しかし自給自足の人たちがまだ多く存在しています。そのような人々が、雨が降らなくなり、自給自足できなくなっています。もともと貨幣経済があまり発展していない地域ですので、

自給自足が阻まれると生活が成り立たなくなります。そのような状況下において、ものを買わなければいけない状況が生じる。最初は自分の土地を売ったり、牛を売ったりします。そのうちに売るものがなくなり、男性は自分の妻、子どもたちを食べさせていけなくなります。イライラしますよね。雨も降らない、仕事もできない。そうすると、洗脳されるように、「悪いのは政府だ」、「反政府軍作ろう」となってしまうのです。「素晴らしい理想郷を作ろうよ」といった言説にうながされ、最初に暴動が生じます。暴動が政府に弾圧されると「やはり政府は悪いんだ」という理解に至る。そのような過程を経て、内戦が発展していくのです。

そのようなプロセスの中で、アルカイダやその他のイスラム過激派が入り、現地の人々がさらに武装化していく。またそのような状況下で、なんらかの支援金が入り、さらに戦いが激しくなっていきます。そして、戦っていれば食べていけることがわかり、そういう戦いを続けてしまうのです。ナイジェリアの場合は、女の子を拉致すれば、売ることができる。それが資金になる、というようなことで、多くの学校でも女性徒が拉致され、売られていきました。そのようなことが繰り返されてしまう。また兵士が足りなければ、民家に入り、物を奪い、子どもたちを拉致して皆兵士にしてしまいます。

このような状況がアフリカや中東の諸地域で生じているのです。それを知ったうえで、自分に何ができるのか、とうことですが、まず温暖化を止めるための行動が重要だと思います。どうすればもう一度、雨を降らせられるか、人間が食べていけて、平和で暮らしていけるのか。食べていけなければ、何かやらざるを得ません。

また政府を改善し、北部の人たちが食べていけるような政策を作らなければなりません。それを放置しているので、現在のような混乱した状況に発展してしまうのです。

「知ることからスタートする」というのは重要です、しかし知ったうえで、真剣に考え、どうすれば問題が解決するのか、ということを模索しなければなりません。宗教だけの問題でもないと思います。ただ彼らは、宗教の理想を掲げ、理想郷を作ろうとしています。「イスラム国」やイスラム教徒は、様々な国で差別の対象とされています。ですから彼らは、18 世紀に存在したカリフの国をつくり、そこでイスラム教徒を集め、コーランに基づいた法律を作り、平和に暮らそうと企んでいます。スペインからトルコにいたる広大な地域と国境を接している地域を全て治めようとしています。もちろんそれは無理でしょうけど、少なくとも彼らは、中東の国境を完全になくして、新たな国家を建設しようとしているのです。可能か不可能かはわかりません。しかしこの戦争が、たくさんの子どもたちを苦しめているのは間違いありません。もう、すでにシリアから 200 万人の難民が出ています。それらの人々を毎日食べさせていくのも大変です。ユニセフも必死に活動をしています。正直言うと、彼らの健康を守るだけでも大変なことになっています。しかしその戦争は終わっていないのです。ですから、我々は今、行き詰った状況に到っているのです。自分に何ができるのか。一生懸命、私たちはユニセフの活動を応援し、少なくとも、元気な子どもたち、平和を愛する子どもたちが育ち、いずれは彼らが彼ら自身の国を治め、そこでの考え方を変えていける人たちを増やしていこうと思っています。私たち、キャンプの中でも平和教育を展開しています。戦争が終息している地域では、大学、高校、中学校でも平和教育をスタートさせています。南スーダンでも、ナイジェリアでも始めているのです。

小さいことかもしれませんが、必死に取り組んでいます。若い人々を育成し、彼らが平和の大使として、自分たちが学んだことを後輩に教えていく。また様々な地域でそのような活動を展開する。女性も重要です。学校に行けないような女の子たちも、次世代の母親になるのです。私たちは、様々な地域から招き女性を含む多くの若者を招き、毎年、会議を開催しています。健康や差別、平和教育などについて情報を共有し、若者たちがそれぞれの地域でそのような情報を伝達していくよう、活動しています。

撒いた種がいつか花開くことを信じて行動しているのです。その意味では、現代社会においては、これまで以上に若い世代の人々の知恵が必要とされているのかもしれません。

ユニセフが現在呼びかけているイノベーションには様々な種類のものが存在しています。新しい技術もその一つです。その技術を使って、子どもたちをどうやって救っていけるのか、といったテーマについて皆で考えを寄せ合っています。新しいソフトウェアが開発され、今まで出生届が提出できなかった子どもたちが、携帯電話から登録できるようになったこともその一つです。あるいは、太陽光を使ってコンピュータが使えるようになった、とか。太陽光を利用しての補聴器の利用だとか、今、様々なプロジェクトを推進しています。ぜひ、それらのイノベーションを用い、平和につながる社会を作っていただきたいと思います。

男子学生Ｂ　私の夢は、アグネス・チャンさんのように、世界を駆けて活躍できるような人材になるということです。前に、実家の近くで、ホームレスの方と友達になることがありました。ホームレスの方に、「夢は何ですか」と聞かれたときに、「世界で活躍したい」と言いましたが、その際、目の前の人を幸せにできないのに、そんなことを言っていいのか、と葛藤したことがありました。ですから、目の前の人を幸せにしつつ、世界の人を幸せにする、ということが可能なのかどうか、という点について質問させていただきたいと思います。

アグネス・チャン　もちろん、目の前の方も大切だと思いますが、自分の夢がもし、世界の子どもたち、あるいは世界の困っている人たちを助けたいのであれば、それが自分の使命ではないでしょうか。日本のホームレスを大事にしたいというのは、その課題に対し、一生懸命行動している人たちがいます。それはそれらの人々が自身の夢を実現しているのです。あなたはあなたの夢を実現すればいいと私は思います。これもあれもやる、ということはできません。できる人もいるでしょうけが。もし、両方やりたいと思えば、そ

のような団体を作ればいいし、あるいは、大学を卒業するまでは、ホームレスの人たちのことをやる、大学を卒業したら海外の仕事をやる、と自分の中で決めればいいと思います。全ての人は救えません。この現実は受け止なければなりません。私だってそうです。私は、すべての子どもを救いたいのです。日本の中で、虐待されている子どもたちも救いたいです。でも、ぜんぶは救えないのです。みんなで一緒にやらなければならなりませんから。もう一つ大切なことは、一人の人でも幸せにできたら、それは自分を褒めなければなりません。そうでなければ続けられません。なぜなら世の中には、悲しいことが溢れているからです。私は、シリアにも行きたかったです。しかし今年は行けないのです。国が止めているからです。南スーダンにも行けない、と言われましたが行けました。シリアには行けないのです。そういう気持ちも、日々持ち合わせています。ボランティアをやっていくと、何か夢を持っているとフラストレーションも積もります。しかしそのフイラストレーションと付き合うこともとても大事なことなのです。欲張りすぎないことが大切です。自分が一生懸命であれば、それで、よしとしなければなりません。かならず積み重ねによっていい結果が出ると思います。ホームレスの方は、日本に戻ってくるたびに訪ねていけばいいじゃないですか。「景気はどうですか？」と。「私も頑張っているから頑張ってください」と。そのようにサポートすることもできると思います。しかし、自分で全てできると思うのは無謀なことです。すべてを成し遂げることができる人はいません。自分の夢に集中して、それを追いかけてください。

男子学生Ｃ　私は将来、世界を舞台に活躍する写真家になりたいと思っています。現在は、創価大学の写真部に入部しています。世界で活躍する写真家になりたいのですが、アグネス・チャンさんのように、世界で活躍する人になるために必要なことはなんでしょうか？

アグネス・チャン　そうですね、私の場合は、意図して世界で活躍するようになったわけではありません。したいと思って、いろいろな仕事で世界に行

けるようになったのではないのです。私の場合、子どもが好き、子どものことをやりたい、歌が好き、というような気持ちは強くもっていました。その意味では、歌の翼に乗って現在の状況を築いてきたように思います。ところで、あなたがさきほどおっしゃられた「世界で活躍する写真家」とはどういう写真家ですか。報道写真家なのか、芸術性をもった写真家なのか、どういうものを撮りたいのでしょうか？

男子学生Ｃ　ジャンルというのは決めておりません。今の日本や世界の写真家の場合、専門分に分かれています。先日、授業で「エキスパートではなくプロフェッショナルを目指せ」という本を読みましたが、そこでは一つのジャンルにこだわるのではなく、いろいろな分野に精通していくことの重要性が強調されていました。私も、写真を撮るに際して、求めている人に対して対応できるような、つまりユーティリティに対応できる写真家になりたいと思っています。

アグネス･チャン　そうですね。確かに現代の写真家は大抵､なんらかのジャンルにしたがって活躍していますね。しかしそれには理由があるのです。歌手の場合も同じです。私も、いろいろなジャンルの歌を歌いたいと思います。しかし、成功するためには、やはり一つのジャンルで「あの人にしか撮れない写真がある」と人々に思われなければ成功できないのです。成功できないというよりも仕事が来ない。ですからやはり私は一つのジャンルで技術を磨くことが大切だと思います。私の「ひなげしの花」という歌ですが、それは大ヒットしました。しかし私はその歌しか歌えない人ではありません。様々な歌を歌います。しかし自分の代表作は絶対に必要なのです。写真家の場合、他の仕事と違う点はそれが表現者だということです。その写真を見て、皆の心が震える、というような作品が必要です。

　ですから、必ずしもジャンルを決めなくてもいいとは思いますが、代表作を作らなければならないと思います。これが課題です。そして、結局、その代表作が、例えば猫であれば、来る仕事のほとんどが猫の写真の依頼になります。ほとんど猫だけです。フラストレーションはたまるでしょう。先ほど

も申しましたが、それをバネにしなければなりません。私の場合も、「平和の歌」など他のジャンルの歌も歌わせてもらえるようになりましたが、そのようにいろいろな仕事ができるのも、代表作があったからだと思います。ですから、最初から「私はなんでもやります」というような姿勢では、なかなか仕事が来ないと思います。まず代表作を作って、それから広げるという姿勢が大切です。狭いところから広いところへ広げていくことが重要です。広く浅くでは、なかなか仕事が来ないと思います。頑張ってください。まず、創価大学の学生さんに「え～、すごい」と言われるような作品を作ってください。

女子学生Ｄ　平和のために女性だからこそできること、女性の使命について教えてください。

アグネス・チャン　これからは、女性が、男性が、という時代ではなくなってくると思います。少なくとも私はそのように願っています。しかし子どもを産み育児をするという役割は、女性にとって重要な課題だと思います。男性は現在の時点で子どもを産めません。将来産めるようになるかどうかは判りませんが。

ですから、女性が心の中に命の魔法をもつこと、命の輝きを忘れない、ということが非常に重要であると思います。現在では、魔法というものが存在しないと思われていますが、命を生み出すという行為に限って言えば、今も魔法は存在していると思っています。自分の中に子どもが宿るのです。お腹を蹴るのです。そして出てくるのです。本当にそれはすごいことだと思います。その魔法、そのような命のきらめきを信じるということは女性にとって非常に重要なことだと思います。それが基本だと思います。命の大切さを、自分も感じ、人にも伝えていく。生きていることの有難さを愛する人や友達に伝えていく、ということが女性の使命であると思います。

それ以外の点では、「女性だから、男性だから」という考えを乗り越えていくことが重要であると思います。これからはそういう枠組みを、取り払うことが大切です。

女性だから、男性だからできない、というようなことはないと思います。子育てにしても、これからの時代、男性が一緒にやればいいと思います。ぜひ、男性の皆さんも経験してください。本当に楽しいですから。子育ては報われます。うちの夫を見てもそう思います。彼は育児にすごく関わりましたので、子どもは今でも彼に懐いています。一緒に飲んだり、旅行をしたりと、すごく報われています。羨ましいほどです。だから、「女性だから」というのは、もう無いと思うんです。

ただ、壁はいっぱいあります。だからこそ今の大学生の時代に力を蓄えておかなきゃいけない。男性よりももっともっと頑張って勉強して。男性よりももっともっといっぱいものを考えて。決して男性を敵にする必要はないんですけど、その心構えが大事です。彼がすごい作品を作るんだったら、私だって写真家になるから、もっといいものを作るよ、みたいに競り合っていっていいと思うんです。女性だから控えめに、というような考えはもう必要ありません。ぜひ男性のみなさん、女性を応援してください。「なんだ、あいつ、僕よりも成績が良いんだから、じゃあ、お茶飲んであげない」なんて思っちゃダメ（笑）。奥さんは良い遺伝子を持っているほうがいいんですから、自分より強い女性を探しましょう。

司会　それでは時間が近づいてまいりましたので、アグネス・チャンさんに最後のまとめの一言をお願いいたします。

アグネス・チャン　私は、大学生の時が一番いい時期だと思っています。皆さんは、とても真剣に学生を育てようとしている大学に在籍していると私は思っています。こんなにいい時期は、人生に二度と来ないとの思いで、この四年間、あるいは二年間、一分一秒を大切にしながら過ごしてください。先生から、なんでも吸収してください。わからないことがあれば、どんどん聞いてください。教員は、実は質問されると嬉しいのです。嬉しい顔をしない教員の方もたまにはいらっしゃいますが。「今日もたくさんの学生が質問に来た」「質問者が並んでいたよ」というような話をよく聞きます。そういう

ことは教員にとって非常に嬉しいことなのです。先生から学ぶものはたくさんあります。いろいろな人生経験もありますし、いろいろな国にも行っています。今日の講演では、四人の人としか対話ができませんでしたが、あなた方の進路についても、いろいろな教員の方に意見を聞いてほしいと思います。また、友達の存在が重要です。友達からたくさんのことを学んでほしいと思います。語り合ってください。喧嘩もし、仲直りもしてください。そうして絆を深めていけば、一生涯の宝の友となっていきます。ぜひこの四年間を一生懸命楽しんでください。そして、平和とか世の中のために役立つ人間に成長してください。

最後になりますが、私の平和に関するアルバムの中に「そこにはもう幸せが生まれているから」という曲が入っています。そしてもう一曲、池田先生が作詞してくださった“Peaceful World”という曲も入っています。今日はほんの少しですが、最後に、歌手として歌で締めくくりたいと思います。サビの部分だけですが聴いてください。

この歌には「Peaceful World」「Peaceful World」というくだりがあります。私は、いつもコンサートで歌う時、このフレーズが来ると手で平和の輪を作って歌います。恥ずかしがらずに、私と一緒に平和の輪を作ってください。そのくだりになった時に、隣の人の顔に当たらない程度で。ではサビの部分だけ歌わせていただきます。

♫ できることから　一歩を踏み出せば
歩んだ足跡に　いつの日か仲間が
Peaceful World　Peaceful World
いつの日か
Peaceful World　Peaceful World
いつの日か（歌唱）

本日は大変に有難うございました。（大拍手）

司会　以上で、「みんな地球に生きる人」と題する、アグネス・チャンさんの記念講演を閉会いたします。アグネス・チャンさん、本日は大変に有難うございました。（大拍手）

講師紹介

アグネス・チャン　1955年、香港生まれ。1972年に来日し、歌手デビュー。「草原の輝き」「ひなげしの花」などが大ヒット。本年でデビュー44周年を迎える。1994年にはスタンフォード大学で教育学博士号を取得。現在、香港バプティスト大学客員教授を務める。日本ユニセフ協会大使としても、子どもたちの人権を守る活動に献身的に取り組みながら、今も歌手として、平和のため、世界の子どもたちのために歌い続けている。本学創立者である池田大作SGI会長とも親交があり、2007年には池田会長（筆名：山本伸一）の詩に自らが作曲した「そこにはもう幸せが生まれているから」を発表している。